

公開シンポジウム

子どもが地域社会でともに育ち合う環境とは ～認定こども園・家庭・研究者の責任～

座長：一色 伸夫（甲南女子大学総合子ども学科教授／国際子ども学研究センター所長）

この公開シンポジウムは、「認定こども園」が平成27年度以降、全国的に増えていく中で、子どもが豊かに育つ社会の構築をテーマとして、乳幼児期の問題を総合的・多角的に議論する場として開催した。神戸・大阪の保育園・幼稚園の先生方が数多く来場され、本学の大学3年生も100人を越えて参加した。

最初に5人の先生方に15分程度の話題提供をいただき、豊かに子どもが育つ社会の構築を様々な角度から語っていただいた。

北野幸子先生は、「子どもを中心に考えましょう」ということと、「地域に根ざしましょう」ということ、それから「エビデンスを元にと研究者の視点」というのは、全部繋がっていく。新しいシステムの中で、公立、私立、幼稚園、保育所と言っている場合ではないと思っています、と話された。

安家周一先生は、子どもたちの待遇をよくするために、行政に働きかけたりすることをPTAがしている。ところが、保育所の方では保護者組織があっても、時間的な余裕がタイトなので会合をしたり、訴えかけたりする機会が取れない。その意味では私たち事業者も一緒に訴えることが必要で、子ども全体の環境をよくしていくことに一番近いのかもしれない、と話された。

梅崎高行先生は、母親がうまくまだ言葉も話せない子どもの気持ちを先読みして、「嬉しいのね」とか「悲しいのね」という、子どもはどう思っているか分からないけれども、親がそのように関わる、先読み傾向が、子どもの発達の足場になって子どもの成長を育むと話された。

榊原洋一先生は、子ども視点について、いろいろなレベルがあり、保育の質、制度、経済的な面などがあるが、子ども自身の考え方だと思う。親の方は経験があり、子ども自身に自分で選ばせると、親の方が厳しく見て、その頃合いが難しいかと思う、と話された。

山縣文治先生は、あえてセクトを持つべきだと思う。但し、子どもセクト。このままいくと、子どもの人口が減って、高齢者等にどんどん予算がいつてしまう。縮小される子どもグループの中でいがみ合いをしてどうする。大切なのは子どもの世界をどう守るかという意味のセクトがある、と話された。

私も、先生方のご意見を伺いながら、育児・保育・教育によって、子どもに優しい心、共感の心が育つことにより、子どもも大人も人の心を深く読み取ることができると。地域社会がともに育ち合う環境とはそのようなものだ確信した。

話題提供

山縣 文治（関西大学教授）「子ども・子育て支援制度と子育て支援」

北野 幸子（神戸大学准教授）「家庭との連携に関する保育者の専門性」

安家 周一（あけぼの幼稚園園長）「良質な生活と遊びを保護者とともに作り上げる E.C.E.C の環境」

梅崎 高行（甲南女子大学准教授）「認定子ども園はいかにして“ちょうどよい子育て”を支えるか」

榊原 洋一（日本子ども学会理事長）「保育園・幼稚園で行われている保育の内容はそんなに違うのか？」

